

令和4年度 第1回

早稲田大学所沢校地B地区自然環境評価委員会

会議次第

日時：令和4年11月28日（月）
15時00分～

場所：早稲田大学所沢キャンパス
100号館5階第一会議室

1. 開会・あいさつ
2. 議事
 - (1) 前回評価委員会議事録の承認について
 - (2) B地区におけるモニタリング調査の結果について
 - (3) その他
3. 閉会

**令和4年度第1回 早稲田大学所沢校地B地区自然環境評価委員会
議事要旨(案)**

日時：令和4年11月28日(月)15時45分～17時30分

場所：早稲田大学所沢キャンパス100号館5階第一会議室

出席委員：A委員長、B委員、C委員、D委員、E委員(オンライン参加)

1. 開会・挨拶

○評価委員会事務局(F)：定刻より15分過ぎてしまいましたが、オンライン参加のE先生を含め、皆様お揃いになりましたので、「令和4年度第1回早稲田大学所沢校地B地区自然環境評価委員会」を始めさせていただきます。本日は、今年度1回目の委員会ということで、最初にA地区の葛入湿地を見ていただいた後に、B地区に移動し、木場道等を歩きながら湿地や樹林地のコナラのフラスが出ている状況等の主要な場所について、Hさんに説明していただきながら現地の確認を行いました。毎年、第1回の委員会では現地視察を行っておりますが、今回は、2名の委員と埼玉県そして所沢市、早稲田大学の関係者のメンバーによる視察となりました。3名の委員の先生方については、室内のこの会議からのご参加となりますが、事前の都合の良い時に別途、現地でご説明をいただいているとも聞いております。そうしたことから、B地区の秋の最新の現状に基づいて、モニタリングの結果等へのご意見をいただければと思います。委員会の開催に当たりまして、早稲田大学のG総務部長から、ご挨拶をいただければと思います。どうぞよろしくお願いたします。

○早稲田大学総務部長(G)：皆様こんにちは。ただ今ご紹介いただきました、早稲田大学総務部のGでございます。本日は、お忙しいところ委員の先生方のご出席を賜り、厚くお礼申し上げます。今回は先程、事務局からもありましたように所沢キャンパスの自然環境を現地で見ただき、B地区での取り組みについて改めて先生方のご専門のお立場から、ご検討をいただければと存じます。私も前回の委員会の時に同行し、キャンパスの自然環境や緑の現状を見たところですが、所沢キャンパスは今年で開校35年目を迎えるなか、環境が良くなっている一方で、前回の委員会でも報告のありました「ナラ枯れ」の問題なども生じております。本学の本庄キャンパスにおいても、「マツ枯れ」による安全管理と自然の保護を図るための樹林管理計画を検討しているところでございます。本日は、先程の現地視察の状況やモニタリングの結果も踏まえ、今後のB地区の方向性につきまして、ご意見を賜りますようよろしくお願申し上げます。

○評価委員会事務局(F)：G部長、ありがとうございました。本日は委員5名の全員にご出席いただいておりますけれども、オブザーバーの「所沢市みどり自然課」と「埼玉県みどり自然課」にも、ご出席いただいておりますので、議事の最後にあるその他の所で一言コメントをいただければと思います。議事に先立ちまして、本日の資料を確認させていただきます。会議次第A4サイズ1枚、前回の議事録、自然環境調査室によるA4横長の報告書資料、埼玉県生態系保護協会が担当したモニタリング結果の資料、以上が本日の資料になります。過不足ないでしょうか。それでは、この先の議事はA委員長に、お願したいと思っております。

2. 議事

(1) 前回評価委員会議事録の承認について

●A 委員長：今日は、皆さん全員ご参加いただけたので幸いです。私も今日は最初からの参加は都合により出来なかったのですが、先程、Fさんからご紹介いただいたように、B地区の状況については、事前に現地で説明いただいていたので、理解しているつもりです。それでは、最初に、議事次第にしたがって、前回の評価委員会の議事録の承認について、事務局よりご説明をお願いいたします。

○評価委員会事務局（F）：はい。これにつきましては、各委員の先生あるいは県と市にも、事前に送っておりますが、本日までのところ、修正等のご連絡はいただいております。何かこの場でありましたら、ご意見していただきたく思います。

●A 委員長：記載内容に、気になることや修正などはございましたでしょうか。大丈夫でしょうか。そうしましたら、この内容でご承認いただいたということにいたします。

(2) B地区におけるモニタリング調査の結果について

（公財）埼玉県生態系保護協会（F・I）：説明省略

早稲田大学自然環境調査室（H）：説明省略

【質疑応答】

●A 委員長：モニタリングの結果について、ご説明ありがとうございました。今回の結果について、委員の方々から何かご質問・ご意見あれば、お願いします。

●B 委員：まずはナラ枯れが一番気になります。前回も現地を見て、今回もさらに広がっているような様子が確認されて、ここでも大きな問題になっていると思います。効果的な対策がなかなか無いということでは、コロナについてはゼロコロナからwithコロナになってきたように、ナラ枯れもゼロ・ナラ枯れから、with ナラ枯れということを考えないといけないかもしれない。トトロの森でもナラ枯れへの対応について、2つの方針を議論しています。1つは、そのままの状態、なすがままにすることでもやむを得ない。もう1つは、コナラ・クヌギにこだわらずに、ナラ枯れに対して抵抗力の高い落葉高木の樹種に変えていく方法。現在、こういった方法については、他でも議論されるようになってきているようです。例えば、狭山丘陵であれば、代表的な落葉広葉樹であるアオハダはナラ枯れに強い。こういった樹種を残し、ナラ枯れに強い森にしていく方法もあると思います。

○早稲田大学自然環境調査室（H）：大変参考になるご意見、ありがとうございます。

トトロの森や緑の森の博物館は、早稲田大学の敷地とも隣接していることもあり、早稲田大学だけで対応を検討するだけでなく、連携して包括的に対応を検討していくことも重要だと考えています。引き続き、情報交換を含めて協力していければと思いますので、よろしく申し上げます。

●A 委員：資料(スライド No.40)の図を見て思ったのですが、ブルーの破線の西側の樹林は、ナラ枯れが発生していないのですか？

○早稲田大学自然環境調査室（H）：ここは緑の森の博物館の範囲で、早稲田大学の敷地外で未確認のため、こういう凡例になっています。実際には敷地外でもナラ枯れはあり、図のように直線的に分かれていて、これより西側にはナラ枯れがないというわけではありません。

- A 委員：わかりました。他に、ホタルの個体数の経年変化についてですが、今年のホタルの個体数のピークが著しいのはなぜでしょうか？ 考えられる要因としては、どのようなことがありますか？
- 早稲田大学自然環境調査室（H）：ホタルの個体数の増加については、環境要因に関する調査が少ないため、正確にはわかっていません。ここ数年では、ホタルの発生場所の周辺は、大きな攪乱もなく安定した環境が維持されてきたので、現況を維持するとともに来年以降の調査結果についてどう変化するか慎重に検討していきたいと思えます。
- D 委員：モニタリング調査の結果を詳細に説明していただき、ありがとうございました。私の方でも、Hさんの協力により、2019年から早稲田大学周辺のチョウ類を調べています。全体として64種を確認していますが、そのうち11種の絶滅危惧種（埼玉県RD）が記録され、6種が早稲田大学B地区湿地西側で確認されています。現在、調査データを取りまとめているので、来年度には報告できればと思っています。
- C 委員：興味深い報告がいろいろありましたが、ひとつは、ススキ草原をどう人工的に再生するか、ということがあると思えます。これまでススキを移植してススキ草原を創出してきたが、単一でややつまらない植生群落だった。その中で、これまでの試験で埼玉県生態系保護協会から説明があり、資料のスライド写真にもあったように、ようやくきれいな花が咲き多様性が認められるようになった。自分の関心としては、今後どうしていくのかということが気になります。所沢の早稲田の敷地外でも、現在のような手法・やり方を普遍化できるのか、という点を考えながら実施していくことが、大事ではないかと思えます。
また、Hさんから報告があった水収支についてはとても興味深いテーマですが、今後、どのようにスケールアップしていくのか。その課題については本人も言っていました、かなり難しい部分があるかと思えます。何か良いアイデアはすでにありますか？
- 早稲田大学自然環境調査室（H）：先行事例では、シミュレーションによる分析もあるようですが、本室の現状では難しい部分もありまだ明確なものはありません。国内の報告に限れば、おおよそ針葉樹が事例の中心なので、里山の水収支という視点で今後も調査を継続できればと考えています。
- A 委員長：E委員、報告は聞けましたか。何かありますでしょうか？
- E 委員：はい。聞いていました。ありがとうございます。ナラ枯れに関して、1つは、やはり里山環境は、能動的な維持管理が必要で、歴史的には狭山や所沢あたりでは15～20年周期で伐採されてきたという実態があると思えます。今後の管理としても、Hさんから説明があったように、萌芽更新を進めていくことには賛成します。ナラ枯れのためには、強制的にでも行って良いと思えますが、労力的な限界があるので、その進め方が課題だと思います。
もう1つは、環境学習利用について、これまでコロナでなかなか積極的には進めにくい環境であったかとは思いますが、説明ではようやく再開することができるようになってきたようなので、大変かとは思いますが再度積極的に展開していくのが良いかと思えます。見せていただいた写真や説明の中で、学生や市民だけでなく、ホタル観察会で子どもたちが参加したり、留学生の日本文化体験の場にもなっていることは、活動の広がりが感じられ、とても良い取り組みだと思います。
- A 委員長：委員の皆さんから、ご意見をいただきましたが、私の方からも若干感想を言わせていただきます。最初のご説明にあったように、3つの目標設定に基づいて進めてこられたわけ

ですが、ひとつめの今ある環境や動植物を維持していくや、ふたつめの水田・湿地をどうするのか、仕組みを検討することについては、ご報告いただく中である程度、答えが見えてきたようにも思います。人がどう参加するのか、関わるのかの課題については、地域によって違いがあるものの、早稲田大学としての特徴や地域との関わり等を踏まえた検討を進めていただくことが望ましいことと思いました。

(3) その他

- A 委員長：最後の議事になりますが、事務局としては、その他の所で何かありますか。
- 事務局 (F)：本日、オブザーバーとして、「埼玉県みどり自然課」および、「所沢市みどり自然課」に参加いただいています。コメントをお願いします。
- 埼玉県みどり自然課 (J)：埼玉県みどり自然課で、自然ふれあい担当の J でございます。現在、県としてもナラ枯れの問題については認識しているところですが、予算確保がすぐには出来ず、対応が難しいという実情があります。早稲田大学に接する緑の森の博物館の園路沿いだけでもナラ枯れが 300 本もあり、対応方法についても、苦慮しているところですが、今回の発表内容なども拝聴する中で、貴重な情報を得る機会となりました。今後も協力して対応できればと考えております。本日は、参加させていただき、ありがとうございました。
- 所沢市みどり自然課 (K)：所沢市みどり自然課の K です。本日は、現地の状況を拝見し、委員会にも参加させていただき、ありがとうございました。手前みそとなりますが、所沢市ではこの 20 年で緑地保全の網掛けが進み、現在は 100ha 近くの樹林が保全管理を必要としている現状にあります。条例に基づく「里山保全地域」として指定した菩提樹池等では、市民参加による保全管理活動に取り組んでおりますが、最近新たに上山口の水田を里山保全地域としました。上山口水田では、これまでの農家の方々による水田の耕作が難しくなり、市が水田を借りて保全をするようになっていますが、水田を耕作し管理することは大変難しく大きな課題になっています。また所沢市が策定した生物多様性戦略に基づき、早稲田大学人間学部の N 先生と自然環境調査室の H 先生にもご協力いただき、所沢市と覚書を取り交わし、オオムラサキの生態調査を進めてさせていただいているところでございます。今回の発表内容は大変参考になることも多く、今後とも市へのご支援をいただきながら引き続き協力関係を築いていければ幸いです。どうもありがとうございました。
- A 委員長：貴重なご意見ありがとうございました。県や市からの期待が大きく肩が重くなる気もいたしますが、一層頑張らなければという気持ちにもなりました。他に、何かありますでしょうか。
- 早稲田大学総務部環境安全担当課長 (L)：前回の委員会の時にも、少しお話をさせていただきましたが、自然環境調査室に今年度から新しい職員が配置されましたので、2 名のスタッフを紹介します。まず、嘱託職員の M さん。4/1 から着任しています。
- 早稲田大学自然環境調査室 (M)：M です。これまで静岡大学、法政大学で教員をしていました。分野としては、植物を専門としており、特に森林学や山岳植生学ということになりますが、それだけではなく地理関係の会社にも所属してきた経験があります。ここでは研究はしません。自然環境調査室で行うことに取組んでいきますので、よろしくをお願いします。
- 早稲田大学総務部環境安全担当課長 (L)：もう一人。O さんは、理工学院の実験室から異動してきました。

○早稲田大学自然環境調査室（O）：よろしくお願いいたします。

●A 委員長：この評価委員会は、当初、B 地区の開発計画に対して、アドバイス・助言をするのが役割であったと思いますが、次第に役割が変わってきて、保全や環境の維持管理に関するアドバイス・助言に移ってきた経緯があるように感じています。この委員会をいつまで続けるのか、ということもある。委員の方々も高齢化しており、私も3代目の委員長となります。自分もこう見えて71歳。自然環境調査室のHさんは長年、担当されてきてこれまでの経緯などもよく理解されていると思いますが、大学の制度の関係で異動する可能性があることを前回話しがあり、それが今回ご紹介いただいた嘱託職員の方に変わるということであれば、その期間が過ぎた後はどうなっていくのか、大丈夫なのかと心配な一面もあります。その辺りは、いかがでしょうか。

○早稲田大学総務部環境安全担当課長（L）：自然環境調査室は当初の機能もあったかと思いますが、現在の自然環境調査室の役割も変わらず大学内で重要なものになっていると認識しています。Hも専任職員としてジョブローテーションの対象となりますので、いずれは嘱託職員のMに引き継いでいく訳ですが、彼自身も調査の経験がありますし、担当する内容は問題なく継続していけると考えています。自然環境調査室の役割もこれまでと変わらず、今後も続いていくことをご理解いただければと思います。

●A 委員長：現在、開発の予定等はどのようなのでしょうか。

○早稲田大学総務部環境安全担当課長（L）：開発計画との関係については、当面ないように聞いていますが、その辺りは担当課としてはいかがでしょう。

○早稲田大学企画建設部（E）：当初の計画はありましたが、現在、開発の予定はなく、新築などの開発はないだろうと思っています。

○早稲田大学総務部環境安全担当課長（L）：これまでの役割だけでなく、むしろ自然環境調査室から、発信して早稲田大学の役割をアピールしたいと考えています。

●A 委員長：この件について、委員の方々からは何かご意見はありますか。

●C 委員：私も所沢については、それこそ大島先生がご苦労されていた当初から知っていて、自然環境調査室ができた経緯について、自然との調和、もっと言えば、当初、早稲田大学が土地を転売するのではないかという疑念に対して、保護団体側の意向を大学が受け入れて自然環境調査室が設置されたということもあります。そうしたことから評価委員会は、当初、建設のインパクトに対して、助言・アドバイスをしてきたわけで、早稲田大学は、保護団体・埼玉県・所沢市とは、最初はむしろ対立関係にあったものが、長年の取組みの中で時代が変わり、今は互いにwin-winを探る関係になってきている。そういう意味で、Hさんはこれまで長く携わってきており、これまでの経緯も全部把握していて安心できると思っていました。自然環境調査室は、「箱」としての役割も重要だと思いますが、それ以上に誰が来るかということが大事。人が大事。専任職員からそうでない体制に変わっても大丈夫なのか？ うまく継承されるようにする必要があると思います。

●B 委員：自然環境調査室は、当初はPさんだったわけですが、自然保護団体との約束で早稲田大学が正式に設置したものです。オオタカの営巣が発見されていて、特にその部分が最初は重要な案件になっていたこともあります。その数年後に、オオタカの繁殖は確認されなくなってしまったのですが……。自然環境調査室の役割には、調査を行うことだけでなく、保護団体との調整をすることも大きな仕事だと思います。今は、保全、維持管理の意義が大きくなっただ

けに、もっと積極的に内外に発信すべきであり、前回の委員会でC先生からも意見があったようにプロの職員を置くべきだと思うし、その価値は十分あると思います。むしろその役割が増していることから、自然環境調査室を「環境保全センター」としてもいいのではないかと思います。

●D 委員：先ほどA地区・B地区を視察して、改めて大学敷地内の自然環境は素晴らしいと感じました。早稲田大学の「宝」であり、狭山丘陵の「宝」でもあると思うので、自然環境調査室での調査の蓄積をさらに重ねて「狭山丘陵のことは早稲田に聞けばいい」というくらいになるのが良いと思います。「自然環境調査室」の存在はとても重要だと思いますし、B委員の意見のような「環境保全センター」として早稲田大学がアピールすることが良いと思います。

●A 委員長：委員の方々から、色々と意見がありましたが、早稲田大学としてはいかがですか。

○早稲田大学総務部長（G）：それでは、私の方からひとつ伺いたい点があるのでよろしいでしょうか。先ほどの委員長のご意見は、この評価委員会をもう止めて良いのではないかと、委員の高齢化というのもあり、若手に継承していった方が良いということなのか。それとも、今後の方向性などについて、役割も変わってきているので、改めて確認という意味なのか。その辺りはいかがでしょうか。

●A 委員長：後者の方です。年齢の部分はありますが、決してやりたくないとか消極的な意味ではなく、むしろこれだけ様々な取組みの成果が蓄積されて来ていますので、私たちがやれる間は可能な限り早稲田大学に協力していきたいと思っていることが、委員の皆さんの考えだと思います。

○早稲田大学総務部長（G）：貴重なご意見をいただき、委員の皆様にも改めて感謝申し上げます。私としましても、自然環境調査室の存在意義については、全く同感と考えています。ただ、ご存知のように自然環境調査室は学術研究機関ではないので、調査専門という位置付けではございません。総務部の一係であり、管理部門の1つです。そういったことから、内部においてもなかなか周囲の理解を得るのが難しく、現状専任者を採用することも難しい部分がある、ということも理解しておいていただきたいと思います。いただいたご意見につきましては、改めて検討してまいりたいと思いますので、今後ともよろしく願いいたします。

●A 委員長：すいません。オンラインで参加のE委員は、この件で何かご意見あるでしょうか。

●E 委員：今、議論を聞いていて、いろいろ意見が出たように、各委員ごとに自然環境調査室や評価委員会に対して重視する点は、それぞれであるかとは思いますが、今後の方向性についての考えはおおよそ同じであるように思いました。私も委員となって、まだ日は浅いですが、協力できる部分があればお役に立ちたいと思っています。早稲田大学の組織としてどう考えるのかの問題だと思いますが、総務部として、また自然環境調査室も、委員会の事務局も含めて、一度、整理して見てはいかがでしょうか。ぜひご検討をお願いしたいと思います。

●A 委員長：ありがとうございました。この問題は、すぐに何かの結論が出るようなものでもないので、今日の意見を踏まえて、ご検討頂ければと思います。それでは少し時間も押してしまいましたが、これで議事は最後になりますので、司会進行を事務局にお返しします。

3. 閉会

○評価委員会事務局（F）：本日は、前半の現地視察と後半の室内での委員会と長時間にわたり、ご議論いただきありがとうございました。この委員会は、年2回の開催となりますが、次回は、

年度末の時期に大隈会館での開催が予定されることになります。来月の12月には、カナダのモントリオールで生物多様性条約のCOP15国際会議が開催されますが、気候変動のカーボンニュートラルの問題と同様に、生物多様性の問題も世界的に大きな改善が求められる状況となっています。この早稲田大学所沢校地B地区につきましても、長年にわたる取組みによって様々な成果が得られる一方で、ナラ枯れのような新たな課題が生じている現状にあります。特に、今回の委員会では、自然環境調査室の体制を変更することを踏まえ、この委員会の役割や今後のことについても、ご議論いただきました。委員会事務局の立場から申し上げますと、この委員会の目的や役割、いつまで継続するのか等に関しましては、当初の委員会提言や委員会設置要項等で規定されているところですが、ご議論にありましたように、現状において変化している部分もあり、これらを改めて整理し検討する節目の時期を迎えているのかなど、思いました。そうしたことで、次回の委員会も年度末にございますので、早稲田大学との必要な協議を行い、今後の課題を整理し検討を進めさせていただきたいと思っております。それでは、これを持ちまして「令和4年度第1回早稲田大学所沢校地B地区自然環境評価委員会」を終了いたします。長時間に渡り、ありがとうございました。